

## 研究テーマ

思考力・判断力を高めることで、技能向上を図る指導の工夫

－第3学年「小型ハードル走」・第5学年「ハードル走」の実践を通して－

提案者 森田 哲史

### I 研究テーマについて

#### 1 テーマ設定の理由

昨年までの実践から、技能が向上すると運動への意欲が高まり、主体的に運動を取り組むことで更に技能が伸びるという技能と意欲の相互関係が明らかになった。同時に、得意な運動には繰り返し取り組むが、苦手な運動にはあまり取り組もうとしないという本校児童の実態も明らかになってきた。これらの児童は、社会体育などで経験のある運動には、自信をもって取り組むことができる。しかし、経験の少ない運動に対しては自信をもてずに尻込みをしてしまう。できる運動には取り組むが、できない運動には取り組まないのである。そして、どうしたらできるようになるのか思考・判断している様子もあまり見られない。この要因として、どう動いたらいいのかわからないという「知識の不足」と、わかっているが適切な課題を把握できていないなどの「思考力・判断力不足」の二つが考えられる。学習カードの記述を見てみると、学習内容がわかったこととして書かれていることから、本校児童においては後者の要因が大きいように思われる。つまり、技能と思考力・判断力が結び付いていないのである。



そこで本研究では、思考力・判断力を高めることで、技能向上を図ることに重点を置くこととした。本研究の目指す思考力・判断力の高まった児童の姿とは、「自分の動きを高めるために、適切な課題を把握し、明確な根拠をもって活動に取り組んでいる姿」のことである。動きを比較することを通して、よい動きのポイントを知識として習得する。その知識を基に課題を見付け、課題を達成するための活動に明確な根拠がもてれば、その活動は必要感のあるものとなる。知識を基にして振り返りの視点が焦点化されれば、成果と課題を効果的に振り返ることができる。以上のような知識を活用する課題解決学習を繰り返すことで思考力・判断力が高まり、次第に技能が向上していくと考え、本研究テーマを設定した。

#### 2 テーマにせまるための方策

##### — 視 点 1 —

適切な課題を把握できるようにすることで、思考力・判断力が高まるようにする。

〈手立て〉

- (1) 適切な課題を把握できるように、動きを比較する学習場面を設定する。動きを比較することを通して、よい動きのポイントを知識として習得し、自分の課題を見付けられるようにする。

##### — 視 点 2 —

活動に根拠と必要感をもてるようにすることで、思考力・判断力が高まるようにする。

〈手立て〉

- (1) 活動に根拠と必要感をもてるように、指導計画と教材の工夫をする。6学年間を見通した系統性のある指導計画を立てることで、目指す動きを重点化、焦点化する。

#### 《6学年間を見通した系統性のある指導計画案》

学年	時数	教材	高さ	インターバル	目指す動き
第1学年	6	折り返しリレー遊び			直線、蛇行、回旋など、いろいろな方向に走る
第2学年	6	折り返し障害物リレー遊び (シートなどの平面的な障害物)	0 cm	非一定	片足で前方に踏み切って、逆足で着地して走る
第3学年	6	8秒間ハンディキャップ走(40m) 折り返し小型ハードルリレー	30cm 程度	非一定	非一定間隔に小型ハードルを置いて、いろいろなリズムで調子よく走り越えること
第4学年	6	8秒間ハードル走(40m) 小トラック小型ハードルリレー	30cm 程度	一定	一定間隔に小型ハードルを置いて、一定のリズムで調子よく走り越えること
第5学年	6	チーム対抗40mハードル走 (低いハードル)	40cm 程度	一定	第1ハードルを決めた足で走り越え、自分に合ったインターバルを3歩のリズムで走ること
第6学年	6	チーム対抗40mハードル走 (第5学年よりも高いハードル)	60cm 程度	一定	自分に合ったインターバルで、少し高さのあるハードルを上体を前傾させて走り越えること

##### — 視 点 3 —

効果的な振り返りができるようにすることで、思考力・判断力が高まるようにする。

〈手立て〉

- (1) 効果的な振り返りができるように、振り返る視点を示し、全体やチームで話し合う内容を焦点化する。
- (2) 効果的な振り返りができるように、タブレット型端末を活用して可視化による振り返りができるようにする。